

研究分野	資源管理	機関・部	水産総合研究所・資源増殖部、資源管理部
研究事業名	陸奥湾・太平洋北海域マダラ栽培漁業資源回復等対策事業		
予算区分	補助金((社)全国豊かな海づくり推進協会)		
研究実施期間	H21～H22		
担当者	兜森 良則、菊谷 尚久		
協力・分担関係	北海道・青森県・脇野沢村漁協		

〈目的〉

マダラ陸奥湾産卵群の資源を回復し安定した漁獲を維持するため、標識放流を行い、その後の再捕状況を調査し、放流効果と回遊経路を把握する。

〈試験研究方法〉

1 標識放流

鱈再生により、放流魚と天然魚の区別が困難になる場合があるため、本事業では標識方法を従来の腹鰭切除から腹鰭抜去へ変更し、全数を左腹鰭抜去標識とした。また、移動経路把握のため、放流魚の一部については腹鰭抜去に加えリボンタグも装着した。また、放流適地を検討するため、放流場所の異なる脇野沢放流群と佐井放流群の2群を設定し、脇野沢放流群については、むつ市脇野沢の蛸田漁港内にあるマダラ中間育成生簀からの放流、佐井放流群については、佐井村とむつ市脇野沢との境界付近からの放流とした(図1)。

2 市場調査

場所：むつ市脇野沢村漁業協同組合荷捌き所

期間：平成21年12月～平成22年3月

内容：水揚げ魚の腹鰭切除の痕跡の有無と切除の痕跡の左右の別を確認し、その全長、体重を測定した。

3 標識放流後の情報収集の強化

北海道、青森県との協議

〈結果の概要・要約〉

1 標識放流

放流は6月25日に実施した。脇野沢放流群については、平均全長72mmの稚魚19,500尾(内640尾はピンク色リボンタグの二重標識)を蛸田漁港内の中間育成生簀から直接放流した。また、佐井放流群については、平均全長66mmの稚魚5,200尾(内700尾は赤色リボンタグの二重標識)を、船上に設置した1トン活魚水槽に收容し、通気を行った上で約35分かけて脇野沢と佐井の境界付近の沖(水深64m)に運び、船上からバケツにて放流した。

2 市場調査

腹鰭切除の標識魚を、平成21年12月11日から平成22年2月15日までに31尾を確認した。この尾数は調査を開始した平成6年以降では、平成9年の40尾に次ぐ多さであった。

右腹鰭切除の標識魚は16尾であった。全長は63～88cm、体重は2.2～9.1kgの範囲にあり、全長と痕跡の左右の別から4歳、6歳、8歳のいずれかであると推測された。

左腹鰭切除の標識魚は15尾であった。全長は65～88cm、体重は4.0～10.3kgの範囲にあり、同様に3歳、5歳のいずれかであると推測された(図2)。

また、12月は大型魚が多く、それ以降は小型魚が多かった(図3)。

3 標識放流後の情報収集の強化

稚魚24,700尾(うちリボンタグ標識1,340尾)の標識放流に加え、更に平成21年12月～平成22年3月に漁獲された親魚にディスクタグを着け放流したので、これらの再捕報告を喚起するためポスターを作成し、県内漁協に配布した。

また、10月13日に北海道と協議を行い、北海道の関連漁協にもポスターを配布し再捕報告を喚起するとともに、平成22年度は南かやべ漁協の1支場で市場調査を実施することとなり調査体制の強化が図られる。今後、放流効果と回遊経路のより詳細な把握が期待される。

〈主要成果の具体的なデータ〉

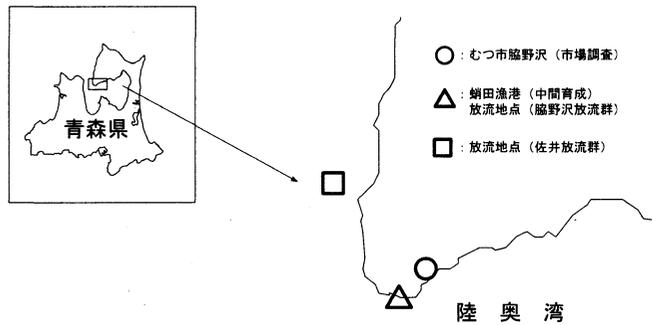


図1 調査位置

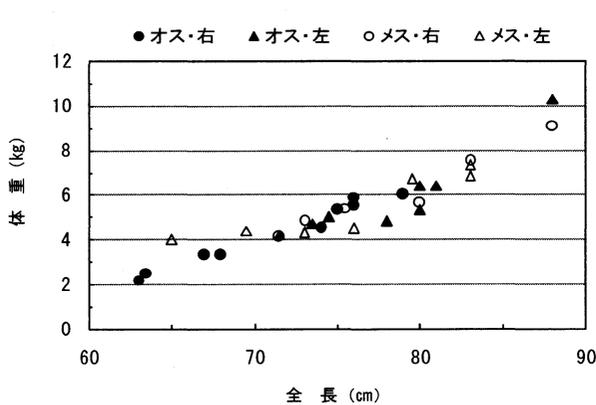


図2 標識魚の全長と体重

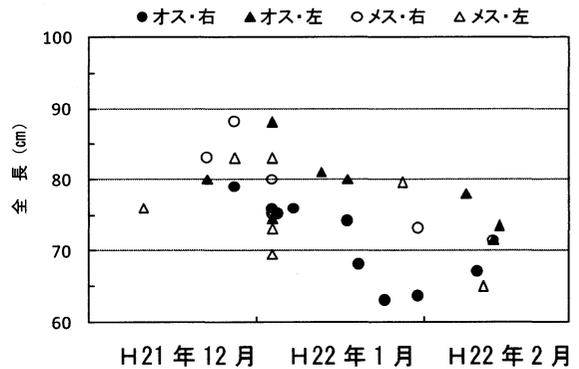


図3 標識魚の再捕年月日と全長

〈今後の問題点〉

大型種苗確保のための種苗生産技術の向上とアンカータグによる標識放流の有効性について検討する必要がある。

〈次年度の具体的な計画〉

今年度と同様

〈結果の発表・活用状況等〉

平成21年度栽培漁業資源回復等対策事業報告書(陸奥湾・太平洋北海域マダラ)に記載